

## 我々はどういう世界に住んでいるか——先日の講演会挨拶補遺

平和統一 NEWS No. 84 (2015/8月号)

渡辺 久義

最近、私の家にある教団の方々が足繁く来られ聖書講義をしていかれる。私は聞きながら自分の意見も述べている。また最近、家庭や社会の健全化、道德教育をテーマとする講演会が2つあり、私はその両方で挨拶に立ち、短く意見を述べた。どの場合も私の講義ではないので、十分に思いを伝えることはできていない。そこでわずかでもこれを補ってみようと思う。私がまず伝えたいのは、我々はどういう世界に住んでいるのか、ということである。布教にせよ、世直し運動にせよ、現在の我々のこの世界がどういう世界であるかを知っていなければ、効果を上げることはできない。ただ漠然と人心が乱れているというのでなく、その分析がなければならない。その大元に何があるかについて、私はある結論に至った。それを押しつけるつもりはないが、ただ、この仮説を立ててみるとすべてがつながって、全体が見えてくる。

道德でも何でもよいが、人間の根本的な考え方に関わる世直し運動をしようとする、どこからともなく必ず邪魔が入ってくる、うまく行かない、という経験をされた方は少なくないであろう。私はこれを、ダーウィン進化論に対する代替案である「インテリジェント・デザイン」理論で経験している。IDは証拠に基づく、きわめて説得力ある理論であるにもかかわらず、学界はこれを認めようとしない。これは各分野のダーウィンの(唯物論的)前提すべてに共通する。これには仕掛け人グループがいる。我々の考え方の進歩を必死に妨げ、思考停止を強いる者たちがいる。

人間の霊的向上の足を引っ張ろうとする者、人間を物的世界に閉じ込めておこうとする者は、宗教的に見れば“サタン”である。家庭の健全化とか青少年の倫理的向上という話題に水を差す連中を、我々は漠然とサヨクと呼んできた。しかしほとんどの人は、サヨクの背後に何があるのかまで考えなかった。我々の住んでいる世界全体を、「サタン圏」あるいは晩年に「サタン権」と呼んだ宗教指導者がいる。多くの人はこれを嗤って、「世の中には悪い人も良い人もいるのだ、そんな言い方はおかしい」と言うだろう。そう言う人は、ブッシュ(父)大統領などアメリカの要人が、しきりに我々が目指すのは New World Order だと言っていたのは、どういう意味かをご存じだろうか。

この New World Order (新世界秩序) は、One World Government (一世界政府) とも言

い、これを目指すのは、グローバル・エリートと呼ばれるごく少数の人々で、彼らはこの地球も、その上に住む人間も、自然資源も、すべて本来自分たちの所有物だと主張し、神に逆らうのを使命とするルシファーの帰依者である。つまり「サタン圏（権）」完成を本気で考えている者たちだ。これも信じられないという人は、自分で調べてごらんになるとよい。ただし学界も教育界もメディアも、彼らのコントロール下にあるから、いわゆる教科書にそんなことは書いてない。

これは講演会で触れた話だが、映画監督アーロン・ルッソ（最後に暗殺された）が、自分とニック・ロックフェラーとの親交と絶交の経緯を暴露した、有名なビデオがある（日本語字幕がついている）。ニックは、アーロンを自分の陣営（つまり NWO 陣営）へ引き込もうとして交友が続いたが、あるときニックが、彼ら以外の人間を「奴隷ども」と呼んだことから絶交となった。ニックは、9・11 テロがやがて起こることを知っていた。また彼があるとき、ルッソ監督に「君はウーマン・リブ運動が何のためか知っているか」と聞くので、彼が「女性の同等の権利のためだろう」と当たり前の答えをすると、ニックは笑って言った、「お前は馬鹿だなあ、あれは俺たちが出資して始めた運動だぜ。一つは税収のため、もう一つは、家庭に母親（妻）がいないことを社会の常識にすることによって、家庭を破壊するためだ——そして君の最終目標は何だという問いに、世界中の人間に（遠隔管理の）マイクロチップを埋め込むことだ、と答えた。

彼らの「21 項目の将来目標」と称するものがある。これは要するに、宗教や道徳をはじめとするすべての伝統的な価値の破壊を目指すもので、その第 6 項目には、「ドラッグの使用を奨励し、ポルノを一つの芸術形式として合法化すること」とある。第 4 項目には、「マインド・コントロールと称するものによって、一人ひとりすべての人間をコントロールする技術を開発すること」、第 2 項目には、「すべての国家的アイデンティティと国家的プライドを、完全に破壊すること」とある。

この最後の項目はぎくぐりとする。なぜなら先日、安倍首相がウクライナのポロシェンコに会いに行き、日本が彼の味方であることを確認してきたが、こんなことを安倍さんが自分で考えるはずはないから、これはアメリカに強要されたことであろう。これは「国家的プライドを完全に破壊する」露骨な実例だった。アメリカが日本に対して「さあ、俺の股をくぐれ」と言い、くぐらせたのだった。